

戦後五十数年経った今でも脳裏に焼き付いている。

終戦と共に召集は解除され、その後、電力会社に三十余年勤め、六十一歳で無事退職し、現在は神職として石岡神社の宮司として国家の安泰と我が国の平和、否世界の平和を祈って毎日を送っております。

北満国境警備と初級士官教育の

体験について

山形県 寒河江 達雄

私は、明治四十五（一九一三）年三月三十日、現在の山形県東根市、当時の旧・長瀨村で生まれた昭和七年度徴集兵です。徴兵検査の時は体を壊していたため体位は良かったのですが第一乙種合格でした。

次に私の軍歴の概要を述べます。

昭和十四（一九三九）年八月、歩兵第三十二連隊留

守隊に応召（ノモンハン事件召集）。

昭和十五年十二月、兵科甲種幹部候補生合格。盛岡予備士官学校へ入校、昭和十六年七月同校卒業。

昭和十六年八月、歩兵第一三二連隊に編入を命ぜられ大阪港を出帆。満州北安（歩兵第一三二連隊）

着、同地警備。

昭和十六年十二月、黒河省山神府付近警備。

昭和十七年六月、黒河省神武屯の原隊に帰隊し国境警備。

昭和十七年十一月、前橋予備士官学校付に補される。

昭和十九年四月、東部軍教育隊付に補される。

昭和二十年九月復員。

応召時の私の家の職業は農業でした。

父は昭和十一年、四十九歳で死亡しており、家族は、母と私の下に二人の弟がいました。私の応召は母には大きな苦痛と悲しみでしたが、時局柄「男児の本懐これに過ぎず。勇躍聖戦に赴く」という世相でした。

前述のとおり、昭和十四年八月、山形連隊へ応召入

隊、初年兵教育の基本は「軍人勸諭」を忠実に勉強し訓練に励むことでした。また入隊と同時に「誓文書」を書かされて中隊長に提出しました。班内へ入ると例の私的制裁がありました。初年兵が全員横一列に並ばされて、親にも殴られたことがないのに、数回力まかせに殴られました。この悪い思い出は一生忘れません。一般家庭や社会では行われない蛮行ですが、軍隊という特殊社会では、教育鍛錬の一助として広く実施されてきました。困苦欠乏に耐え、不撓不屈を忍び、与えられた任務達成に邁進するには「何くそ!」との気概が要求されたことに応える、強烈な近道手段だったのです。

昭和十五年、竹沢中隊長に呼ばれ、幹部候補生志願を求められました。私は家庭の事情等のためと辞退しましたが、中隊長の強い説得により、幹候志願を決心しました。

山形連隊で教育の後、昭和十五年十二月一日盛岡予備士官学校へ入隊。学校の教育の基本は「野戦第一線の小隊長教育」で、土曜、日曜もなく、昼となく、夜

となく激しい訓練が行われました。校内はすべて駆け足です。完全軍装（戦地と異なり内地であるため、食糧・弾薬を除くと、約二〇キログラム程度か？）をして匍匐訓練を一時間から二時間やる。軍服にヒジ当て、スネ当てと称する粗末なドンゴロス（麻布）のようなボロ布を、両ヒジ、両スネに巻いて匍匐訓練に汗を流し血を流すことを要求されました。軍袴が破れて継ぎはぎ修理に追われたことです。

盛岡の冬は積雪一メートルぐらになります。一月から三月までは千葉県の習志野ノ原の兵舎へ移って教育を受けました。四月になると、また盛岡へ帰って訓練します。自決する時の「遺言書」を出せとの命令が出ました。自決の方法を区隊長自ら軍刀を抜いて教授。武人のたしなみです。

次に福島県の兵舎で実弾射撃演習。九六式軽機関銃を持ち、三〇メートル走り匍匐して銃を構え、三〇〇メートル前方の目標へ三発五発射しました。十四発撃ち五発命中して学校ナンバーワンの名譽でした。六月富士山麓の滝が原兵舎へ行き一カ月の訓練、昭和十六

年七月末に学校卒業し、山形連隊へ復帰しました。

八月には関特演の大動員で、私共は満州北安の第七二三部隊（山形歩兵第三十二連隊）へ転属。大阪より釜山へ、鉄道輸送で安東、新京、ハルビンを経て北安へ。十月まで連兵場で幕舎生活。甲府の連隊（歩兵第四十九連隊？）が南方へ転出した後の兵舎に入りました。

十二月、大東亜戦争勃発。十カ月程過ぎ、私は黒河省の国境警備の独立隊として派遣を命ぜられました。約六十人の小隊の部下と師団からの通信隊約十五人、乗馬関係、軍馬十頭、軍医獣医を含めて約十人が配属されました。黒河省黒河はソ満国境の地。零下四〇度、風速四〇〜五〇メートル。休んでいる時も手足をバタバタ動かし凍傷予防に努めました。兵舎は平屋建てで周りを土塀造りで囲い、オンドルを作り毛布や乾し草を利用して床とします。寒さとの戦いでした。しかし本当の敵は付近に出没する共産八路軍です。兵舎の周囲には木を結んで鹿砦（ろくせき）を作ります。木を交差させたところに水をかけ凍結、動かぬようにしました。昼

間は原住満人保護、治安維持のための行軍。

途中、オロチョン族が村田銃で狩りをしているのとお会いしました。彼等は射撃の名人で木の股に架銃しノロを狙い、ちよつと銃を叩きます。ノロはその音に敏感に反応し、動きを止めてこちらを向く、その僅かな瞬間に発射。見事に射止めるのは、神業です。そのノロを土産に貰ったこともあります。軍医の検査を経て食材としました。これも現地人との融和、治安維持にも役立ちました。オロチョン族の来隊は数回あり、四五人で乗馬で銃を持ち、日本人と同じ風格で温厚な人達でした。ノロの肉を貰った時はお礼にと白米少々あるいは胃腸薬、タバコ等をあげると喜んで、再会を楽しみにしていました。

寒中の兵舎ではトイレが凍り、シベリア抑留者の体験談と同じで、ツルハシで整理しました。

飲料水は二〇〇メートルほどの距離のところ掘り抜き井戸があり、使役兵が水を汲んで運びます。入浴は外で缶に入る訳にもいかず、土で囲んだ兵舎の土間に五右衛門風呂のようなものを作り、下から火を焚い

て、蓋を踏み下ろして入りました。それも毎日はいれ
ません。辛い病人が少ないので、見習士官の軍医は満
語を勉強していました。対八路军軍、対ソ戦との緊張の
警備勤務の中での、まさに忙中閑ありの時期でした。

満州の冬は長く、地表は春でも凍土掘りには苦労し
ました。私は平時は満服を着て巡察をしました。満人
と駆け合うには、いかめしい軍服よりもこの方が五族
協和の実があると思っていました。

満州人は好意的でした。病人があつたり、請われる
と薬品もあげました。同行する通訳は朝鮮人です。こ
この勤務は昭和十七年三月まででした。

四月に連隊は神武屯に帰り国境警備に就きました。
ちょうど向かい側がソ連の街で、約六キロ程の川幅が
ありました。私はここで初年兵教育に入ったが、間も
なく神武屯より五キロほどの所にある山（標高九五
メートルぐらい、眼下に黒龍江が流れている望蘇山
―文字通りソ連を望む山）の監視哨長を命ぜられまし
た。

この小哨での生活ぶりは、兵力は私以下約二十人、

ランブ生活、食糧は連隊本部より直送され、監視哨は
丘の頂にあり、兵舎は一〇〇メートル離れた谷間に遮
蔽されています。一〇〇メートルの間を一メートルは
どの壕を掘って交通壕として往復します。二十四時間
勤務体制。二人宛二時間交替。怪しい事があると監視
哨は空き缶で「カラカラ」と音をさせ、一〇〇メート
ルの兵舎へ連絡。私は急いで監視所へ行き、情況報告
を受け判定をして、次の日の朝文書で連隊本部へ兵二
人で報告しました。

監視は普通三五倍の眼鏡です。その後一〇〇倍の眼
鏡が来ましたが、陽炎がかかると見えないくらい高度
なものでした。その眼鏡は偽装し、敵にも見えないよ
うに、また直接光線も避けるよう配慮されていますし
た。監視哨勤務は三カ月交替でした。なお黒龍江は冬
季敵寒強風の節は、水面が凸凹はげしく凍結して、人
影も見えなくなるため密入国者等の監視、巡察、情報
等苦勞倍加の激務でした。

時として師団司令部や連隊本部よりの巡察指導があ
りました。常に隊員と一心同体、家族的生活の中で大

変な苦勞を克服しつつ任務遂行に努力した隊員の面影、思い出は忘れ得ない感謝の強烈な印象です。私は兵に「お前たちの留守家族の方々の祝いごと、不幸、困った事で手紙が来たら、班長を経て私に申し出よ」と常に言っておりました。あるとき、「手紙が来て、俺の家のカーチャンが子供をなした」との吉報があった。私はお祝い状と「本人は元気でやっているから心配するな」と返事を出しました。そして戦後昭和三十八年頃、結婚式に来てくれとの通知が来ました。満州のあの時代に生まれた子供が結婚するようになったと「俺さへ来て、祝してくれ」ということで、私は水戸まで祝いに行ったこともありました。満州の思い出はたくさんありますが、部下の皆さんは本当に一億一心の鑑として頑張って、あの困境警備にあたったことを申し伝えます。

次は初級士官教育について申し述べます。

昭和十七年十一月末、教育総監部からの命令で前橋予備士官学校（盛岡予備士官学校の後身）へ転属とな

りました。前橋での第八期生教育、区隊付将校としての体験を述べます。

前橋での教育の基本は

『勅諭体現 以死必勝

師弟同行 我等は將校道の行者なり』

を目標信念で、第一線野戦小隊長として自信をもってその任務を完全に遂行される小隊長を養成するにありました。

また「修養録」というものを毎晩書きました。日々の言動を深刻に反省してこれを記載します。時々区隊長へ提出し指導を受けました。次に記載した項目を記します。

本校の伝統精神 第一線小隊長の姿

自己の決意 更始一新 和衷協同 健康第一主義

勅諭体現 服従 兵器被服の尊重 不断の努力

勤務の神聖 意気旺盛 環境の整理 決心

内務の履行 責任観念 堅忍 持久 国体の尊嚴

七生報国 その他いろいろ。

さて前橋陸軍予備士官学校へ着任、第二中隊第二区

隊付となりました。第二中隊長は私の盛岡時代の区隊長であり、以前の上官関係が今また前橋で復活、その奇遇に感激したものです。

昭和十七年十一月より昭和十八年四月まで第八期生

昭和十八年五月より昭和十八年十二月まで第九期生

昭和十九年一月より昭和十九年八月まで第十期生

と教育し、卒業させました。この時期は各戦線共に進攻から防御へと方針が転移の時代でした。

さて最後の任地は、昭和十九年四月東部軍教育隊

(千葉県二宮町菜園台―現在習志野市)の区隊長となりました。中隊長は前橋校の第一区隊長でした。気心も知れており、教育畑一本のカリキュラム作りに精励しました。

昭和十九年五月より昭和十九年十二月まで

第十一期生

昭和十九年九月より昭和二十年三月まで第十二期生

昭和二十年八月より終戦復員まで 第十三期生

を教育しました。その頃はもう本土防衛が重点となり、満州から多くの部隊が移動して来ました。習志野

は千葉県の防衛の要であり、首都防衛の重要地域でした。敵は九十九里浜上陸を企図しており、サイパン島の基地からは毎日のようにB29が本土を爆撃に大量に飛来していました。そのため、教育のみに専念出来なくなり、防空と上陸連合軍防御など併列して教育、訓練しなければなりません。

昭和十九年十一月から東京地方の爆撃が始まり、昭和二十年三月以降はB29爆撃機と艦載機の銃撃爆撃が盛んになってきました。

硫黄島玉砕以来、P51などの戦闘機の銃撃が関東諸地域に猛烈に行われ、七月になると沖繩からの米攻も増え、千葉県の軍施設も飛行場も被害が増大してきました。習志野の学校も銃撃を受けたり、B29が撃墜されたのをこの目で見ても、万歳を叫んで喜び合ったこともありました。

私が予備士官学校の教育中、最も痛烈に心に刻まれた事件は、隣の中隊の候補生が対戦車用の破用爆雷演習中、誤って爆発し、その候補生は重傷、手術の甲斐もなく事故死と申すか、戦死したことです。学校葬を

して見習士官の位を贈り冥福を祈りました。私共当時の教官としては永久に忘れられない事件で、特に御遺族に思いをいたすとき残念な惨事でありました。

私達は幸いにして勤務地、任地の差から生を得て今日まで生き延びていますが、常に亡き戦友、先輩、後輩のご冥福を祈り続けねばならないと誓っております。

前橋の場合の卒業生は七〇〇〇人ぐらいおりますが、その中約二五〇〇人が戦死しています。高野山の奥の院に慰霊碑を建て、二年毎に供養の法事をしていゝる。私もあの時代の人々と年々回ぐらい参集してはいますが、会社社長や大学教授など悠々自適の方たちも、昔を語り、「大変な苦勞であったが、あの時の労苦が、戦争の体験が、残された人生でプラスになることが非常に多い」と申しています。我々は英霊の冥福を祈りながら、新しい日本の建設に頑張らなければと思いません。

満州入営より六十年 公務に奉仕

岐阜県 下畑 春造

私は昭和十一（一九三六）年八月、一年早く志願兵として徴兵検査を受け甲種合格となりました。なぜ、一年早く志願をしたのかと、今になると他から尋ねられますが、当時の日本国内の状況や、世界の中で日本の立場がだんだんと不利になり、我々若い者は危機感を、ひしひしと感じている時期であったのです。

そして、国内も、特に農村は冷害とか不況で、私たちの周囲を見ても何か不安であり、満州事変以来、満州国の建設などもあり、満州大陸に活を求める気運が、日本国内、特に農山村の人々の心にありましたし、国策としても、そのように導いていたのでありましょう。私もそのような環境の中に居たので、日本の一青年として、一年でも早く、軍隊に入ろうと思っておりました。